

レポートにおける

「書き手の行動を表す表現」の使用実態 ——日本語母語話者と日本語学習者との比較を通して——

永谷 直子

1. 問題の背景

日本語の文献を理解し、日本語で論文を執筆する必要性の高い分野を専攻する留学生にとって、日本語のアカデミック・ライティング能力を高めることは必須の課題である。二通・佐藤（2020）は、論理的な文章の書き方やレポート作成に必要な知識や技術を学ぶことを目的とした教材であるが、その執筆のために必要なこととして、①論理的な思考方法を身につけること、②論理的な文章の展開方法を学び、それを意識して文章の構成を考えること、③説明的な文章をなるべく多く読むこと。そして、読むときには、内容だけでなく文章の構成や論理の組み立て方にも注意すること、④資料の効果的な使い方や出典の示し方を学び、資料を使った文章の作成に慣れること、の4点を挙げている。本稿はこのうち、②の「論理的な文章の展開方法」に着目した論考である。

「論理的な文章の展開方法」については、論理的な文章に特徴的な文型や接続語句・助詞相当句の抽出がなされるなど、論の展開を支える表現が明らかにされてきたが、清水（2010）はそれらに加え「これから～について述べる」といったメタ言語表現が論の展開の一助をなしていることを指摘している。

メタ言語表現とは、「言語行動について言及し、それ自体が言語表現をとまなう言語行動」（杉戸・塚田1991）であり、談話・文章ともに「自他のコミュニケーションを客観的に捉えて調整する」手段（李婷2020）としてその効果が指摘されてきた。杉戸・塚田（1991）は、「表現の内容とその伝達の過程の調整への配慮」（杉戸1989）を動機とするメタ言語表現が専門的文章のような「素材中心というべき性格の強い文章」に現れやすいと指摘している。このことは、清水（2010）の上記の指摘の裏付けとなるであろう。

アカデミック・ライティング指導においてもメタ言語表現の効果は指摘されている。レポート・論文作成のための教材である浜田他¹⁾(1997)はレポート・論文には、「事実 (Fact) を述べる文」「意見 (Opinion) を述べる文」、「行動 (Action) を述べる文」の3種があるとしている。このうち、「事実 (Fact) を述べる文」「意見 (Opinion) を述べる文」は杉戸・塚田 (1991) のいうところの「素材」に相当すると考えられよう。浜田他 (1997) は「行動 (Action) を述べる文」として、「ここでは、経済性の観点から二つの方式を検討しよう。」「本稿ではセットメニュー方式とカフェテリア方式とどちらが優れているかを分析してきた。」といった例を挙げている。これらは、論文という言語行動のなかで、論の構成や展開といった、これから行う、あるいは行った言語行動について言及する文であり、メタ言語表現であると考えられる。浜田他 (1997) では論文の中でのメタ言語表現の使用が「読みやすさ」に寄与することが説明されており、これらの指導の必要性が示されている。

専門的文章におけるメタ言語表現の使用実態については、母語話者の書いた論文を対象とした調査が行われてきた (cf. 杉戸・塚田 (1991)、清水 (2010) など) 一方で、学習者の使用実態については言及されてこなかった。アカデミック・ライティング指導においては、メタ言語表現が論文・レポートにおいて、「いつ」(レポート・論文中的どこで)、「なにを」(どのような表現を)、「どのように」(どのような形態で) 使われるのが効果的であるのかを示す必要がある。その指導の手がかりを得るためには、学習者が「いつ」「なにを」「どのように」用いているかを把握する必要があるだろう。本稿ではアカデミック・ライティング指導の基礎的な資料とすべく、量的調査を通して母語話者と学習者のレポートにおけるメタ言語表現の使用実態を明らかにすることを目的とする。

2. 調査対象となるメタ言語表現について

本稿における調査対象について述べるのに先立ち、論文におけるメタ言語表現を調査した先行研究について触れておく。前述の杉戸・塚田 (1991) は、論文の記述に関わる書き手の行動そのものの表現に注目し、論文400本を対象に、論文の書き手を主体とする言語行動を意味する動詞を抽出している。そこでは、動詞、その文末形式の一覧、論文における出現位置、機能が示され

ている。清水（2010）は、人文系論文50本について、メタ言語表現を「話題内容を表すメタ言語表現」（例「本稿では～を考察する」）と「方向づけを表すメタ言語表現」（例「次に○○について見てみよう」）の大きく2つに分け、「動詞の種類」「文末表現」を関連させながら考察し、序論・本論・結論のそれぞれにおけるメタ言語表現のふるまいの違いを考察している。

本稿における調査対象も、上記2論文と同様に、論文の書き手を主体とする言語行動を意味する動詞とし、それを以下、「書き手の行動を表す表現」と呼ぶ。なお、杉戸・塚田（1991）を踏襲し、書き手の行動を表す表現には、論文の範囲を超えた言語行動（今後の希望や将来の展望を述べる表現や、過去の調査行動に言及する表現）、読み手への依頼表現、章や節の標題は調査の対象から除外している他、本稿では、思考動詞も対象外としている。

本稿の考察の主眼は3点ある。まず、母語話者によるレポートと学習者によるレポートの間に、書き手の行動を表す表現に量的相違があるのか、という点である（4.1節）。次に、レポート全体における出現位置である。調査対象とするレポートは序論・本論・結論の三部構成をとるものである。本稿では、第1節を序論、最終節を結論、それ以外を本論と機械的に分けた上で、書き手の行動を表す表現の出現位置を見ていく（4.2節）。最後に、一文における出現位置を調査する。上記2論文は主節における動詞に限って抽出し、文末表現のみを調査対象としているが、書き手の行動を表す表現は文末（主節末）に限らず、従属節内でも用いられるものである。本稿では、従属節における動詞も対象とし、文における出現位置、および従属節の種類も調査する（4.3節）。なお、上記2論文はいずれも機能について触れており、重要な視点であるが、量的調査を主とする本稿においては、判断の曖昧性を回避するため、書き手の行動を表す表現の機能については数値化を行っていない。

3. 調査対象となるレポートについて

学習者によるレポート（以下、学習者レポート）は、首都圏の大学で開講された上級日本語クラス（レポート作成を目的とする）において学部1年生が執筆した8本である²⁾。授業は、期間内に3000～5000字程度のレポートを完成させることを目的としたもので、文字数の平均は4,763、総数は38,104

である。形態素数の平均は³⁾3,087、総数は24,693である。社会的な問題・話題を考察することを典型例とした上で、テーマは自由としている。

母語話者によるレポート（以下、母語話者レポート）は、首都圏の大学で開講された「文章表現」クラスにおいて学部1年生が執筆したレポート11本である。文字数の平均は2,967、総数は32,634である。形態素数の平均は1,857、総数は20,428である。レポートは社会的な問題・話題について、資料を使って説明した上で考察を加え、3000字程度でまとめることを課題とした。筆者は両授業の担当者である。授業はいずれも1学期間であり、受講生が期間内にレポートを部分的に提出し、履修者相互、あるいは教員によるフィードバックを受け、執筆と修正を繰り返しながら完成させていくという方式で行われた。修正を経たかどうかは問わず、最終的に提出されたものを調査対象としている。いずれの授業でも、レポートのサンプル⁴⁾を用いて、序論・本論・結論の三部構成を確認するとともに、「行動（Action）を述べる文」を確認し、その意義を説明している。

4. 調査結果

まず、学習者レポート、母語話者レポートにおける書き手の行動を表す表現の数を調査する。今回の調査において抽出された動詞は、以下の通りである。

- (1) 明らかにする、挙げる、扱う、言い換える、言う、行う、解釈する、確認する、仮定する、鑑みる、観察する、比べる、結論づける、検討する、考察する、試みる、言葉を借りる、探る、絞る、示す、記す、紹介する、上述する、調べる、進める、整理・提示する、説明する、総括する、つきとめる、提案する、定義する、提示する、とどめる、取り上げる、述べる、比較する、評価する、踏まえる、振り返る、触れる、分析する、まとめる、見る、明確にする、用いる、予測する、読み解く、理解を深める、論じる

学習者レポート、母語話者レポートにおける書き手の行動を表す表現の数を表1に示す。 χ^2 検定を行ったところ、学習者の数は母語話者より1%水準で有意に多かった ($\chi^2(1) = 8.02, p < .01$)。

表1 書き手の行動を表す表現の数

	実数	10,000語
学習者	162	65.61
母語話者	93	45.53
総数	255	56.51

次に、レポート全体における出現位置を調査した結果を表2に、10000語換算した数値に基づいた結果を図1に示す。第1節を序論、最終節を結論、それ以外を本論として集計したものである。

表2 書き手の行動を表す表現のレポートにおける出現位置

	学習者			母語話者		
	実数	10000語	割合	実数	10000語	割合
序論	52	21.06	32.10%	46	22.52	49.46%
本論	87	35.23	53.70%	32	15.66	34.39%
結論	23	9.31	14.19%	15	7.34	16.12%
総計	162	65.60	100.00%	93	45.53	100.00%

学習者レポートでは本論における使用が半数以上を占めている。学習者と母語話者の本論における使用を比較すると、学習者の数は母語話者より顕著に多い。

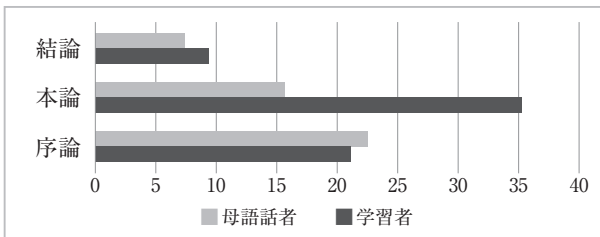


図1 書き手の行動を表す表現のレポートにおける出現位置

最後に、文における出現位置についての調査結果を以下に示す。先述のように、本稿では、従属節における動詞も調査対象としている。表3は、書き手の行動を表す表現の文中における出現位置（主節／従属節⁵⁾の割合）を調査した結果である。学習者、母語話者ともに、文中における出現位置には大きな違いはない。

表3 文中における出現位置（主節／従属節）

節	学習者			母語話者		
	実数	10000語	割合	実数	10000語	割合
主節	73	29.56	45.00%	43	21.05	46.00%
従属節	89	36.04	55.00%	50	24.48	54.00%
総計	162	65.61	100.00%	93	45.53	100.00%

ただし、従属節の種類には異なりがある。従属節の種類の調査結果を表4にまとめる。学習者レポート、母語話者レポートともに最も多いのがテ節、連用中止節であり、両者の間に大きな差はなかった。一方、ト節については、学習者と母語話者の間に顕著な差があった。

表4 従属節の種類(1)（実数6以上のみ）

	節の種類	学習者		母語話者	
		実数	10000語	実数	10000語
1	テ節、連用中止節	26	10.53	29	14.2
2	ト節	37	14.98	0	0
3	ガ節	6	2.43	4	1.96
4	バ節	8	3.24	1	0.49
5	ウエデ節	2	0.81	7	3.43
6	ナガラ節	6	2.43	0	0

表4は従属節の形式による集計である。この節の種類について、意味的な

分類を行う。ここでは、各レポートで従属節に現れた全ての書き手の行動を表す表現につき、節の種類を日本語記述文法研究会編（2008）に基づき、等位節・並列節、条件節、時間節、目的節、様態節、その他に分類した。表5の通り、学習者と母語話者の間で差が最も顕著であるのは、条件節である。

表5 従属節の種類(2)

節の種類	学習者		母語話者	
	実数	10000語	実数	10000語
等位節・並列節	32	12.96	33	16.15
条件節	47	19.03	2	0.98
時間節	2	0.81	10	4.90
様態節	8	3.24	3	1.47
目的節	0	0	1	0.49
その他	0	0	1	0.49
総計	89	36.04	50	24.48

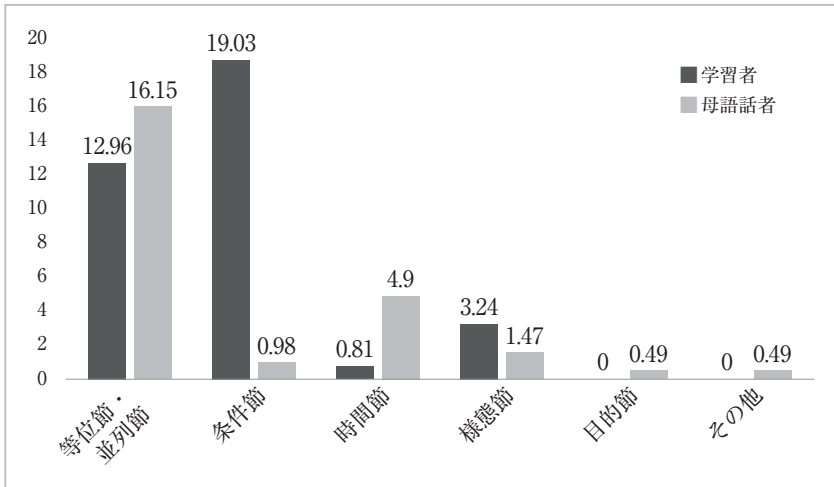


図2 従属節の種類(2) (数値は10000語あたりに換算したもの)

5. 考察

4節における調査結果から、学習者レポートの特徴として、以下の2点が挙げられる。

- ①レポートにおける出現位置に関し、本論における使用が多い。
- ②文における出現位置に関し、主節と従属節の比率には特徴はないものの、従属節の種類には異なりがある。条件節（特にト節）での使用が多い。

以下、②、①の順でこの特徴を考察する。②に関し、(2)～(5)は、学習者レポートにおけるト節の例である。

- (2) これらを観察すると、今後もさらに上がると予想される。(モンゴル語話者)
- (3) それぞれを分析すると、営業利益率の面では、2021年9月期の営業利益が前期から81.8%成長し、約6400億円を記録していることから、本業であるゲーム産業の経営状況が良好で売れ行きがいいことがわかる。(韓国語話者)
- (4) 結果をまとめると、ChatGPT にまつわる知的財産権の問題が最も注目されており、50.79%の人がこの選択肢を選んでいる。(中国語話者)
- (5) 簡単にリーマンショックの原因について述べると、不良信用を持っていた多くの人に金庫が住宅を担保にお金を貸したが、アメリカの不動産のバブルがはじけてしまい、その金を返せなくなり、不況が始まったことである。(韓国語話者)

レポートを作成するとは、(2)～(5)の動詞に示されているように、まさに現象を観察し、分析し、まとめ、述べるという行為である。学習者レポートではそれらの行為がト節に現れ、主節にはト節の行為の結果が示されている。一方、母語話者レポートではそれらの行為が言語化されているとは限らず、結果のみが示される傾向にある。このことから、学習者のレポートでは、それに至るまでの行為、すなわち結果に至るプロセスが言語化される比率が高いのに対し、母語話者のレポートでは、プロセスに相当する行為が言語化

されず結果のみが示される傾向にある、といった違いがあることがわかる。学習者と母語話者の間には、レポートにおける話し手の行動の言語化において、傾向の違いがある、ということである。

次に①の結果について述べる。①の結果から、レポート全体における書き手の行動を表す表現が出現する位置は学習者と母語話者とで異なることがわかる。澤邊（2001）は講義中に講師が用いるメタ言語表現に関する論考であるが、澤邊（2001）はメタ言語表現を「講義全体の見取り図に関わるメタ言語表現」を「メタ・マクロ」、「節や文レベルに関わるメタ言語表現」を「メタ・ミクロ」として区別している。「序論」や「結論」に出現するメタ言語表現の多くは「メタ・マクロ」に相当するといえよう。一方、本論では、節全体あるいは段落全体の見取り図に関わる「メタ・ミクロ」相当の表現もあるものの、(2)～(4)のト節に現れる表現のように「メタ・ミクロ」相当の表現も多く存在する。母語話者と学習者の間で、「序論」や「結論」に差異はなかったものの、本論で異なりが見られたという①の結果は、学習者レポートの方が、「メタ・ミクロ」という、より射程の狭いメタ言語表現が多く用いられていることを示唆しているだろう。

本稿で扱った表現の主体は書き手である。これらの表現を用いて、書き手の行動が言語化されることは、結果的に書き手の存在を暗示することになる。文章・談話における談話参加者の存在の明示度の関係は“Writer/Reader visibility”と呼ばれる。伊集院・高橋（2004）は、それを「書かれた文章において書き手や読み手の存在が言語表現として示される度合い」と定義し、日本語母語話者（JP）と中国語母語話者（CN）の作文におけるモダリティの分析から、CNの方が“Writer/Reader visibility”が高い可能性があると結論づけている。本稿の調査対象である書き手の行動を表す表現は、書き手の存在を明示する表現ではないものの、その存在を暗示するという点で、“Writer/Reader visibility”に関与する表現であると言えるだろう。

前掲の浜田他（1997）は「行動（Action）を述べる文」について「「司会者」のような役割を果たしている文」だと述べている。母語話者レポートでは、序論と結論においてまさに「司会者」のように、全体の見取り図が書き手の行動を表す表現によって示される。(6)～(9)はその例である。

- (6) 本レポートでは、障害者雇用の現状を示すと共に、障害者雇用率全体の向上を目的とした改善案の提示を述べることにする。(母語話者・序論)
- (7) 以下では、2節で現状について述べ、3節で日本と海外それぞれの方策を検討したうえで解決策を提案し、4節で結論を述べる。(母語話者・序論)
- (8) 以上、トランスジェンダーの子どもたちの現状を改善する方法について論じた。(母語話者・結論)
- (9) 以上、スマートフォンを利用してしまふ若者の現状を示し、スマートフォン自体の賛否を考えたいうえで、スマホ依存症を治す解決策について、その是非を検討した。(母語話者・結論)

一方、学習者レポートでは、「序論」「結論」での使用に加えて、「本論」という論の展開における中心的な箇所での「メタ・ミクロ」の使用頻度が高く、「司会者」である書き手の存在が示される頻度が高いと言える。「本論」における書き手の行動を表す表現の機能については更なる分析が必要であるが、「本論」という論の展開の中心にあたる部分で「メタ・ミクロ」が頻出するということは、あたかも歌唱の途中で「司会者」が現れ歌唱が中断されるかのように、論の展開がさえぎられる頻度が高まるということにつながる。今回の結果は、レポートにおける話し手の行動がレポートの「読みやすさ」に寄与するためには、その使用位置と、使用頻度に留意する必要があることを示唆していると言えるだろう。

6. おわりに

本調査の結果は、学習者レポートでは、母語話者レポートとは異なる位置において書き手の存在が暗示されていることを示唆している。一方、レポートはより客観的な記述が求められるものであり、書き手の存在が示される度合いが高いことが「レポートらしさ」を損なう可能性もある。本稿における調査資料は限られたものであり、レポートで取り扱う内容・テーマの統一も図られていないことから、今回の調査結果で明らかになった学習者、母語話者間の違いが、別の要因に誘発された可能性は否定できない。また、レポート

全体における出現位置も序論、本論、結論の3分類という大枠で量を論じたものに過ぎず、特に本論内における書き手の行動を表す表現のさまざまな働きを捉えられていない。今後は本論の内部に迫り、機能を中心とした詳細な分析を行うことにより、書き手の行動を表す表現の効果をより明確なものにしていきたい。

【注】

- 1) 浜田他(1997)はレポート・論文をあわせて「論文」としているが、レポートについて論じる本稿では「レポート」として扱っている。なお、清水(2010)は浜田他(1997)における「行動(Action)を述べる文」を「メタ言語表現」としており、本稿もそれに従っている。
- 2) 授業は2021年度秋冬学期((a)受講生(最終レポート提出者)9名中、(b)学部1年生は4名)、2022年度春夏学期((a)14名、(b)3名)、2022年度秋冬学期((a)5名、(b)0名)、2023年度春夏学期((a)7名、(b)1名)、2023年度秋冬学期((a)12名、(b)3名)の5学期にわたる。本調査では、上記(b)の学部1年生11名の書いたもののうち、規定の字数を大幅に超過したもの(1本)、序論、本論、結論の三部構成の取れていないもの(1本)、初等教育を日本国内で受けた経験のある学習者によるもの(1本)を除外した8本を対象とした。8本の執筆者の母語の内訳は、韓国語3名、中国語4名、モンゴル語1名である。学習者レポート、母語話者レポートともに研究を目的とした、個人を特定されない形でのデータ使用の許諾を得ている。
- 3) 総形態素数は形態素解析支援ツールの「web茶まめ」(<https://chamame.ninjal.ac.jp/>:解析用の辞書として各種のUniDic、形態素解析器としてMecabを利用)を使用して算出した。
- 4) 学習者、母語話者共に伊集院郁子・高野愛子(2020)『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング』アスク出版、に掲載されている「高齢者の運転免許返納制度」を提示している。学習者には浜田他(1997)における「明治近代化の基礎」も加えて提示している。
- 5) 補足節、名詞修飾節に現れるものは今回の調査対象からは除外している。

【参考文献】

- (1) 伊集院郁子・高橋圭子 (2004) 「文末のモダリティに見られる “Writer/Reader visibility” — 中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』123、p.86-95
- (2) 澤邊裕子 (2001) 「講義に用いられるメタ言語表現の一研究—日本語学習者と日本語母語話者の講義聴解との関係」『小出記念日本語教育研究会論文集』9、7-23、小出記念日本語教育研究会
- (3) 清水まさ子 (2010) 「論文におけるメタ言語表現について—メタ言語表現と論の展開とのかかわり—」『NEAR conference proceedings working papers』2-15、国際大学
- (4) 杉戸清樹 (1989) 「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8(2)、4-14、明治書院
- (5) 杉戸清樹・塚田実知代 (1991) 「言語行動を説明する言語表現—専門的文章の場合—」『国立国語研究所報告103, 研究報告集12』131-164、国立国語研究所
- (6) 二通信子・佐藤不二子 (2020) 『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
- (7) 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6 第11部複文』くろしお出版
- (8) 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- (9) 李婷 (2020) 『日本語教育におけるメタ言語表現の研究』ひつじ書房
(本学教授)